第 1 学 年 算 数 科 学 習 指 導 案

1年2組　指導者　岡 本 貴 裕

単　元　　いくつといくつ

1　本単元でめざす子どもの姿について

対象と向き合う子どもの姿【対】	自己と向き合う子どもの姿【自】	他者と向き合う子どもの姿【他】
○一つの数を分解や合成し、一つの数をほかの数と関係付けてみようとしている。	○自らの数についての感覚を働かせ、数の分解や合成をしようとしている。	○仲間の数え方や操作を解釈したり、再現したりしようとしている。

2　めざす子どもの姿を実現するために

本学級の子どもたちは、ものの個数を数える活動に取り組む中で、数えるものの集合を明確に捉え、一つの数として抽象してきた。このような子どもたちが、一つの数を分解や合成することで、一つの数をほかの数と関係付ける学習に取り組む。このことは、数の概念を形成していく過程で、数についての感覚を豊かにすることにつながるであろう。

本単元は、一つの数を分解や合成し、数の概念を形成していく学習である。小学1年生の段階では、幼児期の遊びや生活で数についての感覚が磨かれるような体験をしてきている。しかし、数の分解や合成をする際に、子どもたちは、幼児期から養ってきた数についての感覚を働かせてきたのだろうか。たとえば、10という数を分解や合成する際に、「10は1といくつか」と問う学習過程に子どもの10をつくりたいという思いはない。提示された「10」という数を機械的に分解したり、合成したりすることの繰り返しに終始する学習過程では、子どもはそのよさを感じられず、数についての感覚を豊かにしていくことは難しい。この「10をつくる」という子どもに本来備わった感覚を呼び起こす問題提示や問いかけをすることによって、子どもが自らの数についての感覚を働かせ、数を多面的にみていくことができるようにしたい。そうすることで、これから先、計算の仕方を柔軟に創造したり、数に親しみをもったりする等、数を活用しようとする素地を養うことができると考えるからである。

そこで、以下のような支援を具体化し、本単元でめざす子どもの姿の実現を図る。

○　分解や合成する数を具体物に置き換え、数える活動を仕組む。そうすることで、一つの数をほかの数と関係付けてみようとすることができるようにする。【対】

○　子どもの数え方や操作に違いを見取った際、仲間の数え方や操作を解釈したり、再現したりするよう促す。そうすることで、数を多面的にみることができるようにする。【他】

○　問題提示の際、条件を曖昧にして、子どもの直観を問う。そうすることで、自らの数についての感覚を働かせ、数の分解や合成をしようとすることができるようにする。【自】

3　本単元の目標

○　一つの数を分解や合成し、一つの数をほかの数と関係付けてみることができるようにする。

○　自らの数についての感覚を働かせ、数を多面的にみることで、数を活用しようとする素地を養うことができるようにする。

4　本単元における評価規準

知識・技能（知）	思考・判断・表現（思）	主体的に取り組む態度（態）
○一つの数を多面的にみたり、ほかの数と関係付けてみたりすることができる。	○数の分解や合成の仕方を考えることができる。	○自らの数についての感覚を働かせ、数を分解や合成しようとしている。

5　指導計画（全７時間）

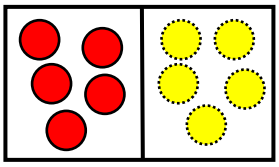
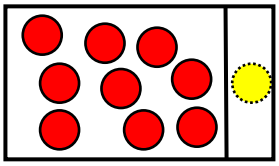
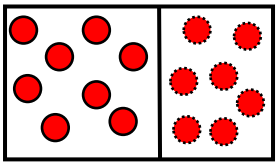
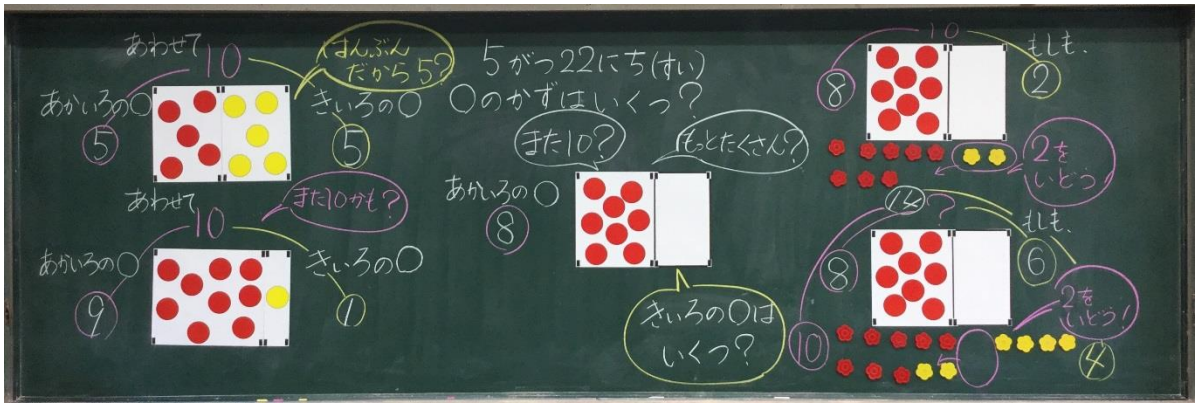
第１次　数の分解や合成の仕方を考える（５時間）

第２次　10を超える数の分解や合成について考える（２時間）【本時１／２】

６　本時案　　【令和元年５月２２日　１０：２５～１１：１０　１年２組教室】

（１）ねらい　　10 や 10 を超える数の分解や合成をすることをとおして、一つの数を 10 に関係付けてみることができるようにする。

（２）学習過程　※下線は３つの向き合う姿が表れている子どもの意識

学習活動・学習内容	子どもの意識	○教師の支援
1　10 の合成について考える。（20 分） ・10 の合成  	・○がいくつあるかを数えるのだね。 ・赤色の○が５個出てきたよ。 **○の数は、いくつあるのかな。** A <u>半分で○が５個出てきたから、あと半分も５個あるのではないかな。【自】</u> ・たしかに。あと、○が５個出てきたら、ぴったり 10 個になるね。 ・あっ、赤色の○が５個と黄色の○が５個でぴったり 10 個になったね。 ・次は、赤色の○が９個出てきたよ。 A あと、○が１個出てきたら、またぴったり 10 個になるね。 ・赤色の○が９個と黄色の○が１個で、またぴったり 10 個になったよ。 ・次も○が 10 個になるのではないかな。	○条件を曖昧にして問題を提示し、子どもの直観を問う。そうすることで、自らの数についての感覚をもとに、数の分解や合成をしようとすることができるようにする。　【自】 ○10 を超える数を数える際、板書上におはじきを並べ、数える方法を尋ねる。そうすることで、おはじきを動かしながら、一つの数を 10 に関係付けてみようとすることができるようにする。　【対】
2　10 を超える数を数える。　（25 分） ・数の分解や合成の活用 ・10 のまとまり ・一つの数を 10 に関係付けてみること 	・今度は、赤色の○が８個出てきたよ。黄色の○が２個ありそうだね。 A たしかに。今まで赤色の○と黄色の○でぴったり 10 個になっていたからね。 B いや、黄色の○がもっと入りそうだから、６個くらいあるのではないかな。 ・でも、６個もあると、数えにくいな。 たしかに、このままだと数えにくいね。 C うん、数えにくいよ。だって、○がたくさんあって、バラバラだからね。 D <u>いや、おはじきを使って、黄色の６個の○を２個と４個に分ければいいのだよ。【対】</u> C <u>本当だ。もともとあった８個に２個合わせて、10 個のまとまりがつくれるね。【他】</u> ・８を 10 にするために、６を２と４に分けて合わせるとよかったね。 ・あれ、赤色の○が７個出てきたぞ。６個のときと同じようにやってみよう。	○10 のまとまりをつくるために、数の分解をしようとする発言に立ち止まり、その意図を解釈するよう促す。そうすることで、８を 10 に関係付けてみることで、○の数を数えようとすることができるようにする。【他】

（３）板書計画